

軽動詞構文 “have a use of” に関する考察 (その1)

—— 不定冠詞の共起に着目して ——

熊 谷 哲 孝

平成28年11月2日受理

A Consideration of the Construction “have a use of” in Light Verb Construction (Part 1) : Focused on the Cooccurrence of an Indefinite Article

Noritaka KUMAGAI

目 次

1. はじめに
2. 先行研究
 - 2.1. Wierzbicka (1988)
 - 2.2. Dixon (1991)
3. 天川 (2000) による考察
4. 有界性を考慮した考察
5. まとめ

1. はじめに

軽動詞構文のうち、have+a+V 構文は共起する動詞群の中で、特にアメリカ英語において use のみが不定冠詞 a との共起した場合の容認可能性が低くなり、代わって無冠詞あるいは定冠詞 the との共起が容認される事象が見られる。本研究の目的は、have+a+V 構文と事象名詞 use の組み合わせで、冠詞との共起になぜこのような「ゆらぎ」が生じるのかを考察することである。

have+a+V 構文や take+a+V 構文は、一般的に「軽動詞構文」と呼ばれ、天川 (2000) によれば、特にイギリス英語やオーストラリア英語でよく用いられる構文といわれる。この構文の不定冠詞に後続する V は動詞の原形が用いられるが、不定冠詞の直後に置かれることから純粋な動詞でなく、「事象名詞」と呼ばれることがある。このことから、本稿では V と表記す

る場合は動詞そのものではなく、事象名詞を指すことを確認しておく。この V に適用できる動詞には一定の制約があることが、Wierzbicka (1988) や Dixon (1991) が先行研究によって指摘されている。そこで、次の (1) を見てみよう。

- (1) May I have a use [ju:z] of your pen for a moment?

Wierzbicka (1988: 348)

天川 (2000) によれば、Wierzbicka は不定冠詞に後続する use はその語尾の発音が有声音の [z] ならば動詞、無声音の [s] ならば名詞という特徴を持つことから、(1) の use は動詞と見なされるという主張しているとする。しかし、不定冠詞は名詞と共起するのが通常であることを考慮すると、Wierzbicka の説明は矛盾することになる。また Wierzbicka は use の語尾の発

音を示しつつも、動詞、名詞のどちらに解釈されるかについて具体的な言及はせず、「非常に口語的 (highly colloquial)」と述べるにとどめている。この (1) の use について、発音上は動詞と区別されるのにもかかわらず、不定冠詞と共起するという矛盾は、どのように説明できるのだろうか。そこで発音の観点から、Wierzbicka の主張が妥当か否かを同僚のアメリカ人英語話者に確認したところ、発音自体に対する指摘は妥当とのことだった。ただし、“have a use of” の中の不定冠詞は必要なく、“have use of” が自然であるという新しい観点が提示された。念のため、この指摘を他のアメリカ人英語話者にも確認したところ、同様の回答¹⁾ だった。ところが一方で、松井 (2009) はこの構文における use と不定冠詞 a との共起について、同僚のアメリカ人英語母語話者に問い合わせた結果、「“have a use of” の使い方はアメリカ英語にはなく、“have the use of” という堅苦しい表現ならば可能である。」という回答を紹介している。つまり、アメリカ英語では少なくとも “have the use of” と “have use of” の 2 つの表現形式が存在し、話者による容認可能性 (acceptability) のゆらぎがある、ということになる。have+a+V 構文で共起できる動詞群のうち、use 以外の動詞は不定冠詞との共起が義務的であるのに対し、なぜ use だけが不定冠詞または定冠詞との共起、あるいはそのどちらとも共起しない「無冠詞」での記述が容認されるのだろうか。

そこで本稿は、はじめに have+a+V 構文で用いられる V にはどのようなものが容認されるのかについて、Wierzbicka (1988), Dixon (1991) が指摘する事象名詞に関する制約、そしてこれらを踏まえた天川 (2000) の先行研究を整理する。次に “have a use of” について、アメリカ英語に見られる不定冠詞の有無のゆらぎは、use の持つ意味に起因した、話者の認知の差異によると仮定して考察を進める。

2. 先行研究

先に述べたように、have+a+V 構文の V に用いられる事象名詞の制約について、天川 (2000) が紹介する Wierzbicka と Dixon の先行研究を見ていこう。

2.1. Wierzbicka (1988)

Wierzbicka は a+V に用いられる事象名詞の制約について、次の (2a-c) を示している。

- (2) a. the *have a V* construction implies that the action goes on for a limited, and in fact rather short, period of time. But it cannot be momentary: it must go on FOR SOME TIME, though not for a very long time.
- b. *have a V* frame cannot have an external goal.
- c. the action (or process) must be seen as repeatable.

Wierzbicka (1988: 298-299)

天川は (2a-c) を、次の対応する (3a-c) のようにまとめている。

- (3) a. 一定時間継続
b. 外的目標を持たない
c. 繰り返し可能

天川 (2000: 31)

また、Wierzbicka の (3a-c) による容認可能性の違いの説明を、次の (4a, b) の例示を用いて紹介している。

- (4) a. have a bite / a cough / a jog / a run / a walk
b. *have an arrive / a build / a depart / a study / a work

天川 (2000: 31)

天川によると、(4a) は (3a-c) のすべての条

件を満たしているのので have+a+V 構文に用いられるのに対し, (4b) は (3a-c) のいずれかに違反しているため, この構文と共起できないとしている. すなわち, arrive, depart は瞬間的行為のため (3a) に違反し, build は繰り返しの行為ではないため (3c) に違反し, そして study, work は, なにか目的があって勉強したり働いたりすることが外的目標と見なされ, (3b) に違反するとしている.

これらの条件を基に, Wierzbicka は have+a+V で共起可能な V の例を次のように挙げている.

- (5) have (a look at / a bath²⁾ / a walk / a lick / a sip / a play / a read / a cry / a cough / a pee / a try / a look for / a think / a suck / a chew / a listen / a feel / a chat / a cuddle)

Wierzbicka (1988 : 338)

(5) を見ると, Wierzbicka が (1) で挙げた, 不定冠詞に後続する V に use の例が含まれていないことに気づく. これはなぜなのだろうか. Wierzbicka 自身は, “have a use of” について, use の発音に関するのみの言及だけである. (3) の条件と use との関係については後で検討するが, 天川は (3) の条件だけでは捉えきれない例として, Wierzbicka が挙げる bite, chew, eat を適用した場合の説明に対する反論を行なっている. それによると, Wierzbicka は bite, chew, eat のうち, eat だけが have+a+V と共起できないとし, その理由として, eat は「食べる」という行為によって, その目的語が「全体的影響」を被る, つまり食べて無くなってしまうことまで含意すると説明する. これに対し, 「かじる」, 「かむ」行為を表す bite, chew は, その目的語が部分的にしか影響を被らないと説明する. また, eat がこの構文で容認されない理由として drink を引き合いに出し, drink の目的語は液体なので部分的に影響を受けるのに対し, eat の目的語は全体的影響を受けるためとしている. しかし天川は「有界的/非有界的」

という概念を用い, 次の例を提示している.

- (6) a. John had a drink of coffee.
b. *John had a drink of a coffee.
(7) a. *John had an eat of custard.
b. *John had an eat of the apple.

天川 (2000 : 33)

天川は「drink の場合には, 非有界的な目的語はこの構文に現われ, 有界的な目的語は現れないが, eat では目的語の有界・非有界に関係なく, この構文と共起しない.」と主張し, Wierzbicka の説明では, (6a) が容認され, (7a, b) が容認されないことが説明できても, 動詞の目的語が a coffee である (6b) がなぜ容認されないかが説明できないことを指摘している.

2.2. Dixon (1991)

Dixon は V に用いられる事象名詞の容認可能性について, 同じ軽動詞構文の take+a+V と (8a, b) のように比較している.

- (8) a. have a bite / a kick / a swim / a cough / a cry / a talk
b. take a bite / a kick / a swim / *a cough / *a cry / *a talk

Dixon (1991 : 352)

天川は, Dixon は take+a+V の V には, have+a+V の下位類を構成しているとし, take+a+V に現れる事象名詞は have+a+V に現れる事象名詞のうち, 肉体的努力を要するものに限るという主張を紹介している. ここで Dixon の look を例にした have+a+V 構文と take+a+V 構文の差異についての説明を概観してみよう.

Suppose Maggie is a small child playing off to one side ; all you have to do is turn your head to look at her. I might suggest *Have a look at Maggie !*, if she is doing something cute. But if Maggie were asleep in her cot in another room and I

wanted you to make sure she was all right, I would be likely to use the TAKE A construction (since you will have to move in order to check up on her), e.g. *Could you go and take a look at Maggie?* Indeed, it is normal to say *Have a look at this* but *Take a look at that*, since more exertion is likely to be involved in looking at ‘that’ than at ‘this’

Dixon (1991: 352)

上記の説明によれば、Dixon が主張する肉体的努力の違いは、対象を「見る」ために、その場に留まったまま頭だけを対象へ向けるか、あるいは別の部屋に移動する形でその場からの移動が伴うかであるということになる。確かに肉体的な努力の違いは明白であると言える。つまりここで Dixon が主張する「肉体的努力を要する」事象名詞は、bite, kick, swim の3つとなる。しかし天川は、次の (9a, b) を例示する。

- (9) a. have a look / a glance / a glimpse / a row
 b. take a look / a glance / a glimpse / *a row
 天川 (2000: 34)

天川によれば、look, glance, glimpse はいずれも基本的な意味は「見る」だが、これらは talk, cough, cry よりもさらに肉体的努力の度合いが低いと考えられるのに、どちらの構文でも容認される。これに対し、ボートなどを「漕ぐ」という意味の row はかなりの肉体的努力が必要とすることが容易に想像されるにもかかわらず、take+a+V 構文では容認されないことを指摘し、Dixon の主張の不備に言及している。

3. 天川 (2000) による考察

この節では、天川自身の考察を見てみよう。天川は Wierzbicka, Dixon の先行研究とその不備を指摘した上で、影山 (1996) の先行研究を引用して自己の主張を示している。影山は have+a+V 構文と共起する動詞は、Vendler

(1967) の動詞の4分類³⁾の1つである activities を、さらに ACT と ACT ON に分けている。ACT は work, rain などの自動詞、ACT ON は hit, kick などの他動詞とする。天川は影山のこの分類を基に、アスペクトの観点から議論を進める。それによると、影山が示唆する「ACT と ACT ON はアスペクト的に継続相であり、それ自体は固有の終了点を持たない。」と「have+a+V 構文は不定冠詞 (a, an) という限定において、元来はアスペクト的に限定されない (unbounded) な行為に限定 (bounded) を加える。」という2点を取り上げ、eat と drink, watch の用例を比較している。この比較を通じて、Wierzbicka が述べる「全体的に影響を与える」という含意を持つのは、デフォルト解釈⁴⁾であると主張する。その上で、天川は次の提案をする。

- (10) a+V に現れる動詞 (動詞句) は、影山 (1996) のいう ACT または ACT ON に属す。ただし、ACT ON タイプのなかで、デフォルト解釈で目的語に全体的影響を与える動詞を除く。

天川 (2000: 38)

そして Vendler が分類する activities に属する動詞でも、目的語が有界的であれば accomplishments になる動詞を、a+V との共起関係から考察し、次の例 (11a, b), (12a, b) を示す。

- (11) a. John drank water *in / for a minutes.
 b. John drank a glass of water in / *for a few minutes.
 (12) a. Mary played the piano *in / for an hour.
 b. Mary played a sonata in / *for an hour.
 天川 (2000: 39)

天川によれば、(11a), (12a) のように目的語が非有界的であればその出来事は未完了だが、(11b), (12b) のように有界的であれば完了となると説明する。そして、次の (13a, b), (14a,

b) を例示し, a+V が完了の出来事を記述する行為と相容れないことを示す.

- (13) a. John had a drink of water.
b. *John had a drink of a glass of water.

- (14) a. Mary had a play of the piano.
b. *Mary had a play of a sonata.

天川 (2000: 39)

天川は (11b), (12b) で用いられる動詞は, 目的語との関係から, Vendler の分類では accomplishments タイプとなり, (10) の条件には違反しないと説明する.

このように, 天川は影山の示唆を援用しながら, アスペクトの観点から have+a+V 構文の容認可能性を考察している. 天川はさらに, 構文に関わる制約と Wierzbicka も言及している「外的目標」にも考察を広げる. 天川は work, study などのような, 他の目的・目標のために行う行為 (傍点は筆者による) を「外在型行為」, run, walk, swim などのような, 他の目的・目標を含まない行為 (傍点は筆者による) を「内在型行為」と定義する. そしてこのことに基づき, 次の文を例示する.

- (15) a. He went out and had a kick of his football.
b. *John had a kick of his destable cousin.
(16) a. Mary had a lick of John's ice cream.
b. *Mary had a lick of John.

天川 (2000: 40)

天川は (15a, b), (16a, b) について, 次のように分析する. (15a) のボールを蹴る行為は他に目的を持たずに行える行為であるが, (15b) の人を蹴る行為は普通何か目的があって行われる. 同様に, (16a) のアイスクリームを舐める行為は, 他に目的があるとは考えにくい, (16b) の人をなめる行為は, 何か目的があると解釈するのが自然であるとする. ここまで見ると, have+a+V 構文で用いられる動詞は内在型

の動詞と捉えられそうだが, 天川は全ての行為を内在型, 外在型のどちらかに明確に区別できるわけではないことに気づいており, 次の例を示すことで, 内在型, 外在型の中間, あるいは外在型に近い行為も含まれることを指摘する.

- (17) a. John had a throw of a boomerang yesterday.
b. ??John had a throw of stones yesterday.
c. ok/?Let me have a push of your new shopping buggy.
d. ??Let me have a rub of that lamp.
e. */??Mary had a stir of the pot.

天川 (2000: 41)

天川によれば, (17a) はブーメランを投げることで自体が目的であるので内在型であるのに対し, (17b, d, e) はそれぞれの動詞の行為が, 何か目的があって行うものと解釈するのが自然であるとし, 外在型もしくは外在型に近い場合, have+a+V 構文とは馴染みにくいと説明する. これらに対し (17c) は, 仮に新しい買い物用ワゴンを押してみても使い心地を確かめたいなら, 押すこと自体が目的と解され, (17b, d, e) よりも have+a+V 構文と相性が良いと分析している. 以上の分析を基に, have+a+V 構文の制約に関する次の条件を明示する.

- (18) have+a+V 構文と共起する動詞は, a+V の条件 (10) を満たすもののなかで, 内在型行為もしくは内在型に近い行為を表すものである.

天川 (2000: 41)

次に, 外的目標の分析を見る. 天川は Wierzbicka も言及する, 外的目標自体が to 不定詞でも表すことが可能なことに言及した上で, have+a+V 構文にこの形式が含まれると, その文の容認可能性が低下することを, 次の (19a, b) を用いて指摘する.

- (19) a. *John had a swim to win a swimming race.
 b. *Mary had a run to catch the train.
 天川 (2000: 42)

天川は (19) の両文とも容認されないのは、時間的に限定された行為を to 不定詞が表す目標達成のための行為と解釈するには無理があるからだと指摘する。また、この比較として、目的を表す to 不定詞が have+a+V 構文に後続可能な例として、(20a-c) を挙げている。

- (20) a. I had a swim to cool down.
 b. John had a walk to calm down.
 c. John had a run to lose some weight.
 天川 (2000: 42)

天川は、(20a-c) のいずれも容認される理由は、例えば (20a) が含意するのは、ちょっと泳いだ後では自然と体が涼しくなっているので、それ以上、この目標のために何かをする必要がないためだと述べ、(20a-c) の to 不定詞が示す目標は、(19) の外的目標と質が異なるために時間的に限定された行為である a+V の制約とは矛盾しない⁵⁾ と結論づけている。

以上、天川の分析を見てきたが、ここであらためてその指摘と主張をまとめると、次の (21a-c) ようになる。

- (21) a. Wierzbicka (1988), 影山 (1996) の指摘を踏まえ、have+a+V 構文と共起できる動詞は、ACT あるいは ACT ON に属するものだが、ACT ON タイプの中でデフォルト解釈において、目的語が全体的影響を与える動詞を除く。その理由は、デフォルト解釈で目的語に全体的影響を与える動詞は、アスペクト的に終了点を持っていると考えられるからである。
 b. have+a+V 構文と共起できる動詞は、基本的に他の目的・目標を含まない行

為を含意するものであり、このような動詞群を「内在型」と呼ぶ。

- c. 外的目標については、それ自体を to 不定詞で表現可能であることを指摘し、結果としてこれが have+a+V 構文に含まれると、容認可能性が低くなることを指摘している。ただし、一部例外あることにも言及している。

(21a) は、Wierzbicka の指摘する、「一定時間継続」という点と合致するものと考ええる。(21b) は、既述の通り、天川自身も気づいている点として、全ての行為を、他の目的・目標を持つことを含意する「外在型」と明確に区別することの困難さがある。これは恐らく、動詞本来の意味もさることながら、動詞が取りうる目的語との関係も影響するものと思われ、このことは本研究で取り上げる“have a use of”における、不定詞のゆらぎと関係すると推測する。これらに対し (21c) は、外的目標自体の解釈自体に問題を含んでいる印象を持つ。Wierzbicka は have+a+V と共起できる動詞は、外的目標を持たないもの、と仮定している。しかし、天川の外的目標の解釈に関する説明だけでは、対象となる文の容認可能性の違いを明確に示しているとは言えない。そこであらためて、既出の (19a, b) と (20a-c) を比較してみよう。

天川は、(19a, b) と (20a-c) の容認可能性の違いを、外的目標としての「質の違い」と述べている。例えば、a+V が同じでも、不定詞句が異なる (19b) と (20c) の容認可能性の違いについて、これまでの天川の主張に従えば、(19b) は“had a run”が時間的に限定された行為を表しており、それが不定詞句“to catch the train”という外的目標を達成するための行為と解釈するには無理があり、結果として容認不可能としている。しかし、なぜそのような解釈が無理なのかについて、具体的な言及をしていない。また、(20c) の不定詞句“to lose some weight”は、(19b) の不定詞句とは外的目標の質が異なるため、a+V の制約に関する (21c)

には抵触しないので、結果として容認可能としている。ここまでの天川の説明では、解釈の無理に関する理由を示す具体的な言及がなく、同様に外的目標の質についても具体的な定義がないため、(19a, b) と (20a-c) の容認可能性に対する客観的な説明が不十分といわざるを得ないことになる。

このように天川の分析は、特にこの構文が to 不定詞句と共起する場合の容認可能性の差異について、十分な説明をしているとは言えないながら、Wierzbicka (1988), Dixon (1991), そして影山 (1996) の先行研究を参照しながら、have+a+V 構文と共起可能な動詞群の選択の基準を明確化することに、一定の寄与をしていると言える。また、本研究が目指す、have+a+V における不定冠詞の有無に関する「ゆらぎ」を明らかにする点においては、特に to 不定詞句が共起する場合の考察に有益な視座を与えている。そこで次章では、天川の分析を踏まえ、石田 (2002) による「有界性」の観点による分析を考察する。

4. 有界性を考慮した考察

これまで見てきたように、have+a+V 構文と共起する事象名詞 (V) には一定の制約が課されることが明らかになり、その具体例の一部が Wierzbicka によって (5) のように示されている。ここで興味深いのは、Wierzbicka 自身が (1) で“have a use of”を取り上げながら、(5) には含めていないという事実である。そこで、(5) を (22) として再掲する。

- (22) have (a look at / a bath / a walk / a lick / a sip / a play / a read / a cry / a cough / a pee / a try / a look for / a think / a suck / a chew / a listen / a feel / a chat / a cuddle)

Wierzbicka (1988: 338), 再掲

ここで (22) の事象名詞について、後続する目的語等が必要なタイプと不要なタイプに下位分

類したものを、次の (23a, b) として提示する。

- (23) a. 後続する目的語等を必要としないタイプ
(a bath⁶⁾ / a walk / a cry / a cough / a pee / a chat)
b. 後続する目的語を必要とするタイプ
(a look at / a lick / a sip / a play / a read / a try / a look for / a think / a suck / a chew / a listen / a feel / a cuddle)

これらが文に用いられる場合、(23a) の事象名詞は「水浴びをする」、「歩く」、「泣く/叫ぶ」、「咳をする」、「小便をする」、「おしゃべりをする」のように、事象名詞自体にその動作・状態が明示的に含意されているので、後続する目的語や修飾句がなくても容認可能である。(23b) は後続する目的語や修飾句、あるいは前後の文脈がないと、容認可能性が低くなると考えられる。ただし、“a play”と“a try”以外は、(23a) と同様、「見る」、「舐める」、「少しずつ飲む」等、事象名詞自体にその動作・状態が明示的に含意されている。ここで、“a play”と“a try”を見てみよう。play は目的語を取らない自動詞として「遊ぶ」という意味がある一方で、目的語を取る他動詞として用いる場合、後続する目的語に baseball や tennis などのスポーツ名が来ると、「(スポーツを) する」という含意が与えられ、piano や guitar などの楽器名が来ると「(楽器を) 演奏する」という含意が与えられる。つまり、play は目的語の有無あるいは種類によって、その意味が規定されることになる。これに対して try は play と同様、自動詞と他動詞の用法がそれぞれあるが、「挑戦する、試す」という基底の意味は、自動詞、他動詞のいずれにおいても保持されていると考えられる。それでは、(23a, b) は石田 (2002) が議論する「有界性」という視点から見ると、どのように規定されるのだろうか。また、本稿で取り上げる“have a use of”の use とは、どのような違いがあるのだろうか。そこで、石田 (2002) の「有界性」につ

いての議論を援用しながら考察する。

石田は、英語の冠詞についての考察結果をまとめたものであり、本稿が扱う have+a+V などの軽動詞構文に直接言及していない。しかし、本稿が取り上げる“have a use of”の、特にアメリカ英語における不定冠詞 a の共起に関する「ゆらぎ」について、注目すべき示唆している。石田は不定冠詞がもつ機能として、認知言語学の観点から、「有界性 (boundedness)」を挙げている。石田は有界性について、「ある名詞の表している対象が、境界線によって仕切られているのかどうかを意味するもの」と定義し、有界あるいは非有界について、「有界的な存在として認識されるものとは、境界線によって仕切られているために、個別的、個別的、非連続といった表現によって特徴づけられる性質を有するものとなり、他方、非有界的な存在として認識されるものとは、境界線がないかもしくは明瞭でないために均質的、非個別的、連続的といった表現によって特徴づけられる性質を有するもの」と説明し、文中における冠詞の有無の基準について、次の (24) を例示する。

- (24) After I ran over the cat with our car, there was cat all over the driveway.
(私たちの車でその猫を轢いてしまった後、ばらばらになった猫が道中に散乱していた)

石田 (2002: 66)

(24) では cat が 2 度登場するが、前者は定冠詞の the が共起し、後者は無冠詞となっている。cat は通常、可算名詞と定義されることから、後者がなぜ無冠詞となるのか、疑問が生ずる場合があるかもしれない。このことについて石田は、前者の定冠詞が共起している cat は「猫」としての形状が認知できる状態であるのに対し、後者の無冠詞の cat は、車に轢かれてしまった後の、バラバラな死体となった状態を表すため無冠詞となる、と説明し、この状況を説明的に述べるため、(25) を提示している。

- (25) After I ran over the cat with our car, there were pieces of the cat all over the driveway.

石田 (2002: 67)

また、やや抽象的なレベルでの有界性について、石田は次の (26a, b) を例示する。

- (26) a. I find German grammar very difficult.
b. I want to buy a French grammar.

石田 (2002: 33)

上記の例では、grammar が有界性に関する評価の対象となるが、石田によれば、(26a) の grammar は言語規則の集合体という抽象的な存在として認識されるのに対し、(26b) の grammar は個別的・具体的な存在である 1 冊の本としての「フランス語の文法書」という有界的な認識が働くため、不定冠詞の a が用いられるという説明をする。このように、石田 (2002) の有界/非有界の判定は、「対象が他のものと区別されうるかどうか」が、その基準となっていることが分かり、それは (25) における cat のような物理的に具体的な対象から、(26a, b) における grammar のような抽象度が高い対象まで適応可能であると言える。そこで、石田のこの観点を、(23a, b) に当てはめて考察する。

石田の有界性の判定に関する観点は、既述のように、対象が他と区別されうるかどうかにある。これを (23a, b) の事象名詞群に当てはめると、その観点は「対象の事象名詞が含意する動作、状態が、他と区別されうるかどうか」と仮定する。この観点で見えていくと、(23a, b) に挙げられる事象名詞は、それが含意する動作、状態において、他と明確に区別されると言える。このことから、少なくとも (23a, b) に挙げられる事象名詞は、他の動作、状態と区別可能という観点において、英語母語話者にとって有界的な認知が働き、その結果、have+a+V 構文において不定冠詞 a と事象名詞が共起できると推測できる。ところで、本稿が取り上げる、“have a use of”における不定冠詞 a が共起に関する「ゆ

らぎ」は、どのように推論すればよいのだろうか。この現象の原因について、特にアメリカ英語では、これまで見てきた Wierzbicka, Dixon などが提案する have+a+V 構文に課される種々の制約よりも、むしろ事象名詞 use そのものの意味である「使う・使用する」という基底の意味が、他の事象名詞より「広い」、あるいは「あいまい」なため、use の意味が非有界的なものとみなされ、結果として冠詞との共起に「ゆらぎ」が生じると仮定する。この仮定をもとに、Wierzbicka が例示する (1) を、(27) として考察する。なお、(27) は不定冠詞 a を削除して表記する。

(27) May I have use of your pen for a moment ?

この場合、“use of your pen”の目的が、“write something with one’s pen”のように事象名詞 use に対して、その目的語であるペンの用途が明確と言えるため、文として容認される。ところで、“use of”の目的語にどのようなものになれるかを考慮した場合、何らかの形で「使えるもの、使用できるもの」が来ることが予想できる。つまり、他の事象名詞よりも、その動作、状態の区別があいまいになる非有界的な傾向が強くなると考えられる。このことは文内において、その目的語に多義語が用いられる際に顕在化する。次の (28) を見てみよう。

(28) ?May I have use of your stick?

(28) において、“use of”の目的語が stick となっているが、stick は「棒状のもの」を基底の意味として、「棒（きれ）」、「杖（ステッキ）」、「さお」などの拡張した意味を持つ多義語である。また、(27) の pen のように、その用途が明確とは言えない場合があるため、use と共起する場合の文意があいまいとなり、結果として容認可能性が低くなると推測される。また、stick の使用目的を顕在化する方法の 1 つとして、to 不定詞を用いて表すことが考えられるが、これ

は Wierzbicka が指摘する、have+a+V 構文に課される (3) の制約のうち、「外的目標を持たない」に抵触する可能性がある。ただし、この点では天川が (19a, b) と (20a-c) を例示して説明するように、to 不定詞を用いることで外的目標を含意させても、それが容認される場合とされない場合がある。しかし筆者が指摘するように、その基準が明確とは言えないため、(28) に to 不定詞句を後続させて“use of your stick”の目的を表すことが容認されるか否かは、今後において、より考察を進める必要がある。

5. ま と め

本稿では、have+a+V 構文において、特にアメリカ英語で生じる“have a use of”の不定冠詞 a の「ゆらぎ」について、先行研究を中心に概観しながら考察を行った。アメリカ英語母語話者によれば、不定冠詞 a が共起することを容認せず、無冠詞あるいは定冠詞 the が生じる場合を容認する、というものである。また、この構文内において、このような不定冠詞の「ゆらぎ」が生じるのは、構文内に共起しうる事象名詞のうち、use のみと指摘している。Wierzbicka, Dixon, そして天川らの先行研究によれば、have+a+V 構文で用いることができる事象名詞には、ある程度の制約が課されていることが明らかにされている。ここで注目すべき点は、Wierzbicka が指摘する「一定時間継続」という観点である。これは石田が提案する、「有界性」と関連する。筆者は石田の提案を援用し、アメリカ英語において、“have a use of”の不定冠詞 a の有無になぜ「ゆらぎ」が生じるのかについて、筆者は use が他の have+a+V 構文と共起しうる事象名詞群と比較して、例えば walk, look, chat はそれぞれ、「歩く」、「見る」、「おしゃべりする」のように、事象名詞単独でその動作内容を具体的に表すのに対し、use は後続する目的語との共起によって初めて具体的な動作が見えてくる、ということから、use は他の have+a+V 構文で共起可能な動詞との意味的な

境界（具体的な動作内容）があいまいとなり、結果として、話者間で不定冠詞との共起に「ゆらぎ」が生ずる、という仮定を立てた。次の(29)を見てみよう。

(29) ?May I have use of your (board / paper / jar / case / can...etc.) ?

“use of”の目的語には、(28)のstickの他に、「それを使って（使用して）、ある目的を果たす」ことが可能な名詞が用いられることが予測される。ただし、(29)に挙げた目的語は、単独の文では「それを使って（使用して）、どのような目的を果たすか」が、目的語に来る単語が多義的であればあるほど不明瞭となる。これを明瞭化するためには、前後に説明的な文を置くか、あるいは(29)にto不定詞を後続させて説明的に明瞭化させることが考えられるが、この際、Wierzbicka、天川が述べるto不定詞句に関する制約との整合性を考慮する必要がある。このことは、今後の課題として、天川が(19a, b)と(20a-c)の例示で主張する、to不定詞の部分で構文内で容認の可否の基準を、さらに具体的に示せるかという可能性の観点から考察を進めたい。また、(29)において、“have use of”と目的語の共起について、どの程度容認される幅があるかについて、今後コーパスデータ分析を活用して検討したい。

謝 辞

本稿執筆にあたり、アメリカ英語の用法について、富士大学専任講師のダニエル・ニューバリー先生と元盛岡大学教授のスーザン・アンハー先生より、有益な知見を賜ったことに深く御礼申し上げます。なお、本稿における誤謬の責任は、全て筆者にある。

注

- 1) アメリカ英語においてこの現象が起こること

について、一種の方言のような地域的偏りも考慮したが、“have a use of”において不定冠詞aが脱落するという指摘をしたアメリカ人英語母語話者2名のうち、1人はアーカンソー州、もう1人はニューヨーク州の出身で、2つの州の物理的距離が比較的離れていることから、極端な地域的偏りはないと判断している。ただし、松井(2009)が紹介するアメリカ人英語母語話者は無冠詞を認めず、定冠詞theを用いると指摘している。このアメリカ人の出身州は不明であるが、地域的偏りについては、今後さらに分析を進める必要がある。

- 2) Wierzbicka (1988) では、“bath”と表記しているが、事象名詞は動詞の原形を用いることを考慮すると、正しくは“bathe”であると思われる。
- 3) 詳細は、影山(1996: 41-43)を参照のこと。
- 4) デフォルト解釈（または、デフォルト解釈）の定義について、児玉(2008: 1224)で、「言語表現におけるデフォルト解釈とは言語表現に欠如していても、話し手・聞き手が現実世界の知識、認知能力の制約、価値観などの信念体系などに従って言外の意味を推論し解釈することをいう。」と説明する。
- 5) 天川(2000)は、同記事象名詞runを用い、to不定詞句が共起する(19b)を、文として容認不可、(20c)を容認可としているが、筆者の同僚の英語母語話者によれば、(19b)と(20c)はいずれもこのままでは容認不可であり、両文とも不定冠詞を削除し、代わりにその位置にtoを挿入して“had to”にすると容認できるとのことだった。このことから、天川の判断基準には検討の余地が残ると考える。
- 6) このbathも2)同様、本来ならばbatheと考えられるが、ここではWierzbickaのオリジナルに従う。

参考文献

- (論文・著書)
 相沢佳子(1999)『英語基本動詞の豊かな世界—名詞との結合にみる意味の拡大—』, 開拓社。
 天川豊子(2000)「英語の軽動詞構文について」『言語研究』(日本言語学会学会誌) 118, 29-53。
 石田秀雄(2002)『わかりやすい英語冠詞講義』, 大修館書店。

- 永本義弘（2012）『冠詞と基本動詞がわかれば英語がわかる』, 南雲堂.
- 影山太郎（1996）『動詞意味論—言語と認知の接点—』, くろしお出版.
- 児玉徳美（2008）「デフォルト解釈の見直し」『立命館文學』第 606 号, 立命館大学人文学会, 1225-1212.
- 松井千枝（2009）「軽動詞構文 have a V の統語的・意味的・文体的研究」『京都ノートルダム女子大学研究紀要』第 39 号, 71-82.
- 山梨正明（1995）『認知文法論』, ひつじ書房.
- Dixon, R.M.W. (1991) *A New Approach to English Grammar, on Semantic Principles*, Oxford University Press.
- (2005) *A Semantic Approach to English Grammar*, Oxford University Press.
- Vendler, Zeno (1967) *Linguistics in Philosophy*, Cornell University Press.
- Wierzbicka, Anna (1982) “Why Can You *Have a Drink* When You Can’t **Have an Eat* ?” *Language* 58, 753-759.
- (1988) *The Semantics of Grammar*, John Benjamins Publishing Company.
- (参考書・辞典)
- 阿部一 著 (2007) 『英語冠詞コーパス辞典』, 研究社.
- 荒木一雄・安井稔 編 (1992) 『現代英文法辞典』, 三省堂.